

Mrs. Gaskell, “Bessy’s Troubles at Home” の 構造と主題

大野 龍 浩

- I. 序
- II. 作品構造の解明
 - A. 六場面の特定
 - B. 主要人物の登場頻度
 - C. Mrs. Lee の存在意義
- III. Mary の存在意義
 - A. Mary の善性
 - B. Bessy と Mary の行動比較
- IV. 結

I. 序

Elizabeth Gaskell の短編小説 “Bessy’s Troubles at Home” (1852) の批評には、主人公 Bessy Lee (15歳) (主たる登場人物については、「図 1 : Main Characters in “Bessy’s Troubles at Home”」を参照されたし) が失敗を通して学ぶこと、即ち、作品の訴える道徳や教訓を指摘して、作品の主題とするものが多い。たとえば、①unselfishness の重要性 (Dullemen 162; Sharps, J. G. 139; Ward xxxi-xxxii; 多比羅 53-54, 59; 山脇 iv-v)、②女性の役割を認識することの大切さ (Bacigalupo 68; Bonaparte 41-42; Stoneman 51)、③自分に課せられた義務を全うすることの神聖さ (Gallagher 78-79; Green 515-16; Rubenius 125, 221; 多比羅 53-54)、④幸福な家庭の必要性 (Rubenius 145-46)、等々 (他に、Manchester の労働者の生活実態を描いた作品群の一つとする読み方をしているものもある (Bonaparte 191; Duthie 72; Gallagher 78-79; Stoneman 46; 山脇 iv))。

いずれも主題を的確にとらえたものであるが、批評としては物足りない。何故なら、このようなことは、作者が作中人物に語らせていることであり、殊更に指摘されずとも、大概の読者には感知できることだからである (主題 (moral と言い換えてもいい) の明白性を指摘して、Bacigalupo は、「Bessy は、

Jem、Mary's doctor、the narrator の三人の説教者に諭される」と言い、語り手のことを“the obtrusive presence of the storytelling persona, who has no scruples about destroying the imaginative illusion”と呼んでいる(67-68)；Launi は「Bessy は Jem と the doctor の二人に諭される」と言う(42)；“[‘Bessy’s Troubles at Home’ has] a clear moral purpose and an explicitly stated Christian message” (Reddy 26))。また、これでは、Mrs. Gaskell の初期作品の欠点としてたびたび指摘される didacticism (教訓癖) を無批判に受容するだけである。上記の批評にこのような物足りなさが伴うのは、作品の内容だけを頼りに主題を判断し、構造面からの裏付けを欠いていることが、その大きな理由の一つである(「作品の内容(作品の一部または全体のメッセージ)」のみを論拠とすると、論者は自説の裏付けとして自分の解釈に都合のよい箇所のみを引証することが可能になるから、作品解釈は論者の数だけ生じることになる。一方、「作品の形式(内面構造・技法)」を論拠にすると、論者は客観的事実を土台にして自説を開陳せざるを得なくなり、その結果、作品解釈は誰が論じてもある程度絞られたものとなる。文学作品が「内容」と「形式」から出来ている以上、「内容」だけを頼りに主題を追求するのではなく、「形式」を土台に「内容」を把握し、その上で主題を探ること——つまり、作品に何が描かれているかではなく、それがいかに描かれているか、に批評の焦点を結ぶこと(川口 38)——の重要性を筆者は痛感するものである。例えば、作中の情報を徹底的に分析・整理した結果、綿密に構想された全体像が『嵐が丘』に隠れていることを証明した C. P. Sanger の“The Structure of *Wuthering Heights*” (1926) を見よ。それまで「内容」のみを論じて酷評されていたこの作品が、以降、この論文の影響を受けないでは論じられなくなった)。

そこで本稿では、「作品構造を詳細に分析することで作者の創作意図を明らかにする」という方法を探ることによって、作品の主題を、構造面から裏付けてみたいと思う。

まず、筋の展開を整理することによって、全体を六つの場面のまとまりに区切った上(Ⅱ-A)、それを基に、場面ごとの主要人物の登場頻度を調べ、重要人物を特定する(Ⅱ-B)(勿論、「登場人物の重要度が言及回数に比例する」とは限らないけれども、それを判断する有効な手段の一つにはなる)。次に、そうしてクローズアップされた Mrs. Lee と Mary について、その描かれ方を検証し(Ⅱ-C、Ⅲ-A)、Mary については主人公 Bessy の描かれ方と比較してみる(Ⅲ-B)。最後に、そのようにして明らかになった Mary の存在意義を、作品の主題に絡めて述べ、本稿の結論とする(Ⅳ)。

II. 作品構造の解明

A. 六場面の特定

筋の流れを綿密に読み込んでいくと、物語が六つの場面から構成されていることが分かる。この項では、そう判断する根拠を述べる（随時、「表 1 : Main Events in “Bessy’s Troubles at Home”」を参照されたし）。

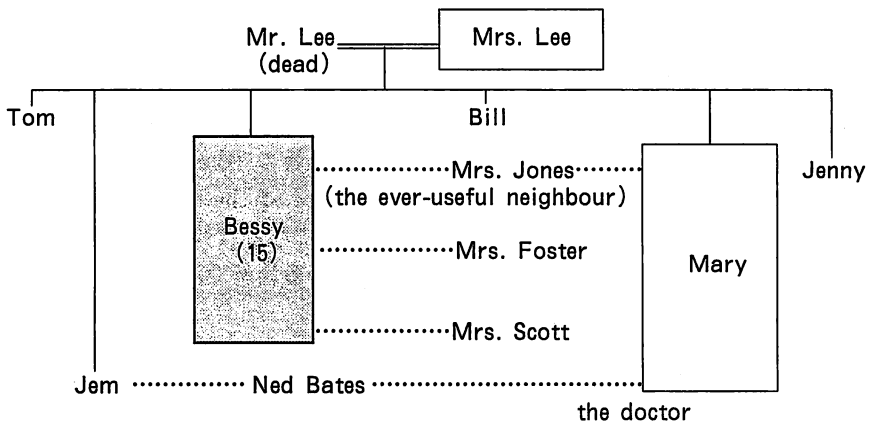


図 1 : Main Characters in “Bessy’s Troubles at Home”

1. 第一場面（514頁第 1 段落～515頁第 8 段落）

物語は、Mrs. Lee の転地療養をめぐる Bessy と Mrs. Lee の会話から始まる。この会話は、Mrs. Lee が Bessy の要請を受け入れ、Southport の病院に入院することを受諾することによって終わるから、ここまでを第一場面とする。ここで作者は、①「自己主張が強い “headstrong”」¹⁾ という Bessy の欠点（期待したほどの喜びを母親が示さないことに、「やっとの思いで入院許可をもらってきたのに」という利己的な感情から、彼女は腹を立てさえする（514）と、②家庭を “comfortable and pleasant” にしておくことが如何に大事なことかという Mrs. Lee の価値観、の二点を読者に印象づけている。この二点は、「Bessy が自己の過ちを認識して、幸福な家庭を作る秘訣を学んでいく」という今後の展開を考慮すると、物語の根幹要素を冒頭に提示していることになる。

2. 第二場面（515頁第9段落～520頁第4段落）

第一場面から二・三日後（記述がないのではっきりとは特定できない）の木曜日の出来事が綴られるのが、第二場面である。「留守中、家庭を“comfortable”にしておく」という母との約束を果たさんとして自分の計画を優先するあまり、兄弟たちに対する配慮を失っていく Bessy の悪戦苦闘ぶりが描かれている。同時に、Lee 家の子供たちの言動とその個性が紹介される。母親不在中の家庭の様子を描く第五場面までの、起点となる場面である。

3. 第三場面（520頁第5段落～526頁第1段落）

この場面は、Bessy が「母親のために足かけを編むこと」に熱中し始めたために家事を蔑ろにすることになり、その結果、家庭内の不協和音が高じるさま、を描いている。ここは、第二場面の翌日（木曜日）の出来事になるし、前場面で描かれた Bessy の利己的なふるまいが敷衍されて述べてあるので、前場面と区別する。「こんな家庭にはいたくない」という趣旨の Tom の科白に続く文 “Bessy looked up, suddenly awakened up to a sense of the danger which her mother had dreaded” (525). は、「Bessy が利己的になるにつれ、家庭の平和が崩壊していく」という創作の構図が表面化している箇所である。

4. 第四場面（526頁第2段落～530頁第8段落）

第四場面は、同じ週の土曜日の出来事を叙述する。ここでは、第二場面・第三場面と構築されてきた Bessy の利己性が、「家の掃除を Mary に任せて、自分は Mrs. Scott 宅にアルバイトに行く」という形で頂点に達し、その天罰であるかのような Mary の事故が起きる。後述の「表 2：“Bessy’s Troubles at Home”における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度」や「図 2：主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ」などから分かるように、第二から第五までの四場面のうち、ここだけ、描写の主体が Bessy から Mary に変わる。いわば、物語の転換部に当たる場面である。

5. 第五場面（531頁第1段落～535頁第3段落）

同じ土曜日の描写でありながら第四場面と区別するのは、ここから Bessy が自分の過ちを認識する段階に入るからである。自ら招いた事態の重要性に圧倒された Bessy は、Jem や医者の説諭に素直に耳を傾ける（Bessy が医者から諭されるのは、時間的には翌日曜日のことだが、時間の推移が段落を変えずに示されていることから察せられるように（534第4段落）、ここでは時の経過はさ

表1 : Main Events in "Bessy's Troubles at Home"

週	曜日	主な出来事	場面	頁(段)	頁数
		(イ) Bessy が、Mrs. Lee を Southport の病院に入院させるための許可証を、取ってくる (514) (ロ) Mrs. Lee、留守中の不安を Bessy に語る (515)	一	514(1) } 515(8)	2.0
	水	(イ) Mrs. Lee が三週間の予定で、Southport へ出発 (515-16) (ロ) 母の留守中、家の切り盛りを任せられた Bessy は、楽しい家庭にしようと張り切る (517) (ハ) 夕方、Bessy が Jem のために借りてきた本の朗読を、Tom は拒否する (517) (ニ) ミルクをこぼした Jenny を、Bessy が叩く (518) (ホ) Mary が、Bessy を慰め、Jenny を寝かしつける (518-19) (ヘ) Jem が、Ned Bates の元へ、くさび用のトネリコ材を取りに行く (519) (ト) 「楽しい家庭にしようと努力するけど、思い通りにならない」と、Bessy が嘆く (519-20)	二	515(9) } 520(4)	4.5
1	木	(イ) 次の日、Mary は、Ned Bates の元へ出かけ、Jem の必要なものをもってくる (520) (ロ) Bessy が、Mrs. Foster 宅へ行き、土曜日に Mrs. Scott 宅で掃除のアルバイトをして月曜日には返済するという条件で、母親に編み物を贈るためのウール代 18 ペンスを借りる (521-23) (ハ) 午後、Mary と Bill が、comfortless home に帰って来る (523) (ニ) Bessy が、Jenny を連れてくるよう命じたため、Mary は明日の授業の準備が出来ない (524) (ホ) Bessy は、勉強中の Bill の質問に、いい加減にしか答えない (524) (ヘ) 「こんな家庭では、世の男たちが、夕方になると、家を出て行きたくなるのも分かる」と、Tom が不平をこぼす (525) (ト) Bessy は、編み物で母親を喜ばすことに夢中で、Mary の都合を思いやる余裕がない (526)	三	520(5) } 526(1)	6.0
	金	(イ) Mary の九九の授業がある日 (524)			
	土	(イ) 朝、家の掃除を Mary に託して、Bessy は Mrs. Scott 宅に出かける (526-27) (ロ) Mary が、Mrs. Jones に小言を言われる (527) (ハ) Tom に怠惰を責められた Mary を、Jem がいたわる (528-29) (ニ) 熱湯を入れた鍋を抱えようとした Jenny を止めようとして、Mary が火傷を負う (529) (ホ) Tom と Jem が工場から帰宅し、家中の混乱を目の当たりにする (530)	四	526(2) } 530(8)	4.0
		(イ) Bessy が、Mrs. Scott 宅から呼び戻される (531) (ロ) Jem が、Bessy の過ちを指摘する (532) (ハ) 「みんなを幸せにすると母さんに約束したのに、こんな結果になるなんて…」と、Bessy が嘆く (533) (ニ) Bessy、Mary の看病をする (534)	五	531(1) } 535(3)	4.5
2	日	(イ) Mary を入院させる手続きを終えて、早朝に医者が来、「Mrs. Lee 帰宅の件は、自分に任せて欲しい」と Jem に言う (534) (ロ) 医者が、Bessy に、過ちを諭す (534-35)			
3	火	(イ) Mrs. Lee が、Southport での療養を終え、帰ってくる (535)	六	535(4)	

※頁数は、Gaskell, Elizabeth. "Bessy's Troubles at Home." *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 3. 1906. New York: AMS Press, 1972. 514-35. による。

して重要ではないので、それを基に場面を区切ってはいない)。ここは、これまで追求してきた「Bessyの利己性」の過ちを明確化し、合わせて、彼女が学ぶべき教訓を述べた部分であり、四場面からなる「劇中劇」の結論部になっている。

6. 第六場面 (535頁第4段落)

最終段落は、作品全体の総括と後日譚になるから、第六場面とし、独立させる。作者はここで、「女性が家庭の幸福に寄与するためには、利他的になり、自らに課された義務を精一杯実行することが重要である」と、作品の主題を吐露する。最後は、再び Bessy と Mrs. Lee との会見の場を用意し、Bessy の悔悛の情の深さを読者に印象づけて、物語を締めくくる。

以上、物語を六場面に分類する根拠を述べてきた。興味深いことに、この作品は、第一場面に「強情な Bessy が、母との約束を果たして、快適な家庭を演出できるかどうか」という問題を忍ばせることによって、それを物語の導入部にし、最後の第六場面で、第二から第五場面を通して Bessy が学んだことが幸福な家庭を作る必須要件であると述べ、それを第一場面で提起した問題の解答にしている。しかも、途中の四場面は、母親不在中の子供たちの様子を描いた、いわば「劇中劇」であり、「起承転結」構造を有している。

作者が何故この作品を「全くの下作 “complete rubbish”」(Letters 845) と呼んだのかは謎だが(その理由について、Laun は、「Bessy の改心が早急、かつ完璧すぎたからではないか」と推量している(41))、このような構成が浮かび上がった以上、少なくとも作品構造に配慮を欠いたからでないことは確かである(“It should be remembered that nearly all of the mediocre writing, both fiction and non-fiction, was done for periodicals, on demand of Dickens or some other magazine editor. As such, it betrays characteristic marks of haste: poor construction, lack of accent or too much accent, melodrama and sentimentality, undeveloped characters who serve as mouthpieces for the uttering of edifying moral precepts. Some of this stuff Mrs. Gaskell good-naturedly wrote for Travers Madge’s *Sunday School Penny Magazine*: ‘Hand and Heart’ and ‘Bessy’s Troubles at Home’” (322). と、Hopkins は手厳しいけれども)。

B. 主要人物の登場頻度

作品構造を解明する第二段階として、前項で設定した場面ごとに、主要人物八人 (Mrs. Lee, Tom, Jem, Bessy, Bill, Mary, Jenny、そして the doctor) が、作品中で何度言及されるかについて調べてみる。

「表2: "Bessy's Troubles at Home" における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度」をご覧いただきたい。これは、作品中の固有名詞と代名詞を基に、各人物への言及回数を場面ごとに累計し、その結果を各場面の頁数で除したものである。「図2: 主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ」は、その結果を視覚化したものである。

このグラフが提示する結果を分析すると、次のような問題点が浮かび上がる。即ち、①Mary への言及回数^が、主人公 Bessy に次いで、しかも、他の主要人物を引き離して多いことには、何か作者の意図が隠されているのではないか。②「劇中劇」四場面のうち、第二・第三・第五場面は Bessy への言及^がが最も多いのに、第四場面に限り Mary への言及回数が突出していること、これにはどんな意味があるのか。③Mrs. Lee は、第一場面と第六場面以外実際には登場しないのに、第二から第五場面でも言及^ががなくなるのは何故か。

①と②は Mary の、③は Mrs. Lee の、存在意義にかかわる問題点である。Mary については、次章で詳述するので、ここでは、Mrs. Lee への言及^ががなくなることの意味について、物語を彼女を中心に読んでみることによって、考えてみたいと思う。他の登場人物について分析することは、「構造分析により執筆意図を探る」という本稿の方針から見て委細に過ぎるので、①Jem と the doctor ^が、Hopkins の言う “undeveloped characters who serve as mouth-pieces for the uttering of edifying moral precepts” (322) になっていることを指摘し、②「子供たちの描写の巧みさ」を評価する意見があること (“Children are themselves the main actors in ... ‘Bessy's Troubles at Home’” (Duthie 73); “a whole family full of varied personalities” (Laun 43); 多比羅 58) を紹介するにとどめる。

C. Mrs. Lee の存在意義

作者は、第一場面で、Mrs. Lee に “[T]here's a deal of temptation to take them [Tom and Jem] away from their homes, if their homes are not comfortable and pleasant to them” (515). と言わせ、それを聞いた Bessy に “I will try to make home comfortable for the lads, if you'll but keep your mind easy, and go off to Southport quiet and cheerful” (515). と答えさせることによって、

表2：“Bessy’s Troubles at Home”における主な登場人物の場面別頁当たり言及頻度

場 面	一	二	三	四	五	六	頁当たり 平均登場 回 数
頁 (段落)	514 } / 515(8)	515(9) } / 520(4)	520(5) } / 526(1)	526(2) } / 530	531 } / 535(3)	535(4)	
各場面の頁概数	2.0	4.5	6.0	4.0	4.5	0.5	
Mrs. Lee	26.0	7.8	4.0	1.3	5.6	8.0	6.7
Tom	5.0	11.3	2.7	3.0	4.0	0.0	5.0
Jem	5.0	8.7	3.8	7.5	21.8	4.0	9.4
Bessy	18.0	24.2	20.8	3.8	28.7	22.0	19.8
Bill	0.5	1.1	3.8	0.5	3.8	0.0	2.2
Mary	0.5	8.9	16.7	32.3	11.6	10.0	15.2
Jenny	1.5	9.6	2.7	14.0	4.0	0.0	6.3
Doctor	0.5	0.4	0.0	0.3	6.7	2.0	1.6

※本表は、Gaskell, Elizabeth. “Bessy’s Troubles at Home.” *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 3. 1906. New York: AMS Press, 1972. 514-35. における主な登場人物の場面別言及回数と、各場面の頁数で割り、場面ごとの一頁当たりの言及頻度を求めたものである。

「母親の留守中、果たして Bessy はその約束を守れるだろうか」という問題を軸に、この物語を展開していくことを表明している。(a)

第二場面の初めには、「Lee 家が、Mrs. Lee を中心にした、思いやりにあふれた家庭であること」が紹介される (①Tom と Jem は稼ぎの全額を母に渡し、②母はそのうち幾らかを各々の銀行口座に貯金させる。③母に栄養をつけさせるのに必要な高価な食物を手に入れるために、二人は銀行から貯金を引き出し、④余ったお金は、母の頼みを無視して、銀行に戻さず、母の治療費に充てる。⑤Mrs. Lee は、必ず子供たちに朝食を与えてから仕事に出かけるし、⑥Tom と Jem の昼食を用意することも忘れない。⑦夕方には、子供たちのために、できるだけ早く家に帰ろうとする)。(b)

その後、「Mrs. Lee が子供たちの行動規範になっていること」が織り込まれる。たとえば、①Jenny を早く寝かしつけようとする Bessy を、Tom は “Mother never puts her to bed so soon” (517). と言っただしなめるし、②夜に外出しようとする Jem を、Bessy は “I know mother would be better pleased if you were stopping at home quiet” (519). と諫める。(c)

第二場面の結末部では、作者は、“I wish mother was back. The lads would mind her” (520). と Bessy に嘆かせ、「Tom と Jem の心を、Mrs. Lee は掌握していること」を示唆している。(d)

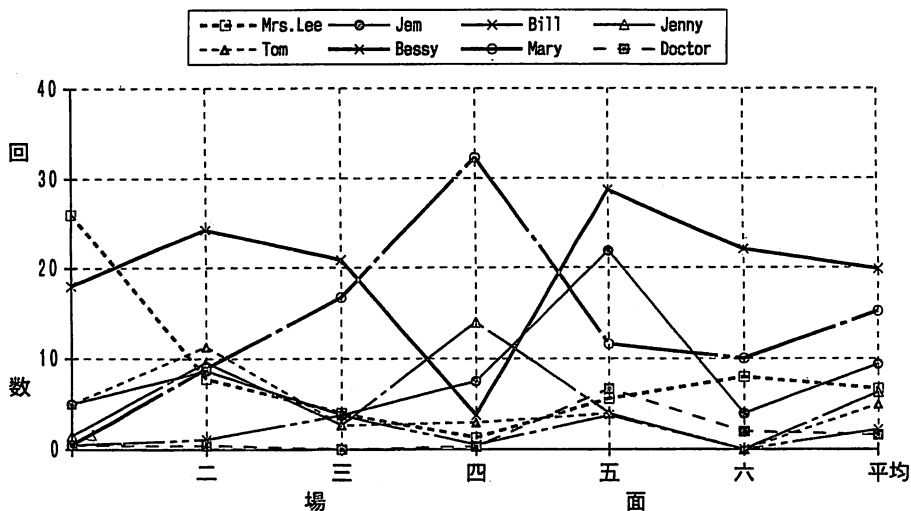


図2：主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ

また、Jemが、くさび用のトネリコ材をもらいに行ったのは、母を不愉快にさせていた窓のきしみをなくすためであったことが判明する (520)。(e)

第三場面の、“I wish mother would have let me go to work in the factory” (522). と不平をこぼす Bessy に対する Mrs. Foster の返答 “Thy mother knows what’s best for thee; and I’m not going to hear thee complain of what she has thought right” (522). は、「Mrs. Lee は子供たちの行動規範であること」を明言したものである。(f)

“[L]ittle handy Mary prepared the porridge as well as the mother herself could have done” (523). には、porridge の出来不出来は母親の作るものが基準になっていること、が明示されている。(g)

Bessy が、Jenny を連れてくるよう Bill でなく Mary に頼むのは、“Bill is too careless, mother says, to fetch Jenny through the streets” (524; emphasis added). だからである。(h)

頭痛のせいで九九が覚えられない時の Mary の思いを、作者は次のように書き、Mrs. Lee が彼女の心の慰めであることを示唆している。“She longed to go

to her mother, whose cool hands around her forehead always seemed to do her so much good, and whose soft, loving words were such a help to her when she had to bear pain” (524). (i)

第三場面の結末部、物語の半ばを過ぎた頃、作者は“Bessy looked up, suddenly wakened up to a sense of the danger which her mother had dreaded” (525). と記し、第一場面で提示した「『家庭を“comfortable”にする』という Bessy の課題」を読者に思い起こさせる。(j)

Bessy は、結局、自分の都合を優先して、母に任された仕事を妹に押しつけてしまうけれども、その動機は「母の足かけを編むため」である (526)。(k)

第四場面で、言うことを聞かない Jenny を脅そうとする衝動を Mary が抑えたのは、母親がいつも Jenny を大切にしていたことを思い出したからである (528)。(l)

火傷の苦痛の中で、Mary が「死ぬ前にもう一度母さんに会いたかった」と弱音を吐くが、これは、彼女が母を頼っていることを表していると同時に、家族の中心が Mrs. Lee であることを示す一例でもある (530)。(m)

Mrs. Lee 不在中の出来事を総括する第五場面の Jem の科白 “I’m going to tell you [Bessy] how I think you got wrong after mother left” (532). や、“I had promised mother to try and make you all happy, and this is the end of it!” (533). という Bessy の科白は、第一場面で提起した課題、即ち、「母の不在中に、Bessy は、母と交わした約束を守り、家庭を“comfortable”にできるか」が筋の展開軸であることを、(a) (j) に続いて、三たび読者に喚起するものである。(n)

「Mary の怪我のことを知らせて、母さんを Southport から呼び戻すようなことはしないで」という Bessy の Jem への嘆願は、母親の病状を心からおもんばかってなされたものである (533-34)。(o)

第六場面の後日譚では、「三週間の療養を終え、Mrs. Lee が元気になって戻ってきたこと」と、「Bessy が Mrs. Lee に、わざと自分の罪を強調して、留守中の出来事を語ったこと」が述べられ、筋の展開軸を四たび読者に提示している。(p)

以上、Mrs. Lee を中心に物語を検証してきたが、整理すると、Mrs. Lee が不在であるはずの第二から第五場面でも彼女への言及がなくなることはないのは、次の三つの創作意図が込められているからであると判断できる。即ち、

- (1) 「母の留守中、家庭を“comfortable”にする」という Mrs. Lee との約束を、Bessy は果たせるかどうか」という問題を基軸に筋を展開すること ◀ (a) (j) (n) (p)
- (2) 「子供たちの母親思い」、言い換えれば、「子供たちの心を Mrs. Lee がつかんでいること (Mrs. Lee が子供たちにとって愛の礎になっていること)」を読者に印象づけること ◀ (b) (d) (e) (i) (k) (m) (o)
- (3) 「Mrs. Lee は子供たちの行動規範であること」を強調すること ◀ (c) (f) (g) (h) (l)

つまるところ、Mrs. Lee には、「家庭を“comfortable”にする模範的な女性」としての役割が担わされており、そのために、子供たちは母親思いであり、家庭内に問題が生じるたびに母を行動規範として偲ぶのである。

この作品には、上記 (b) で列挙したことのほかに、Bessy が Jenny を叩いた後すぐに良心の痛みを感じたり (518)、初めは Mary に非協力的だった Bill が、その後すぐに彼女を手伝ったり (523)、疲れた身体にむち打って勉強している Mary の宿題を Jem が見てやったり (525)、Jem が Mary に優しい気遣いを示したり (528-29)、Bessy の怠慢を腹に据えかねていた Jem が、十分に反省していることを見て取るや、彼女を責めずに、“dear”と呼んだり (531)——等々、家庭内が善意で支配されている様子が随所に織り込まれている。これは、母親の愛情が家庭内の隅々にまで行き渡っていることを強調しようとする、作者の意図による (母親が愛情をかけているからこそ、子供たちも優しくなる)。この意味で、「物語の背景には母の愛がある」(多比羅 52-53; 山脇 v) とする批評は的を得ている (作者は「女性の最大の幸福は母になることにある」と考えていたと、指摘する批評もある (Dullemen 162; “How all a woman’s life, at least so it seems to me now, ought to have a reference to the period when she will be fulfilling one of her greatest and highest duties, those of a mother” [Mrs. Gaskell’s diary on 4 August 1835] (Rubenius 125))。

Ⅲ. Mary の存在意義

前章で「図 2 : 主要人物の場面別頁当たり言及頻度グラフ」を分析した際に指摘した Mary の存在意義に関する二つの問題点について、検討してみよう。

① Mary が主人公に次いで言及されるのは、とりもなおさず、彼女が準主役

級の役割を担わされているからであることは容易に想像がつく。また、②第四場面で Mary への言及が急増するのは、Bessy に掃除を任された後の彼女の奮闘ぶりが中心に描かれるからであることも容易に分かる。同時に、この場面には「Mary の火傷」という「筋の転換点」が描かれているので、このことが言及増加の大きな要因となっていることも見逃せない。以上の点を考慮すると、作者は「準主役級の登場人物に火傷を負わせた」ことになる。この創作上の工夫には、一体どのような意味があるのだろうか。

A. Mary の善性

「Mary への言及頻度が Bessy に次いで高いことの意味」を明らかにするために、Mary がどう描かれているのかを、順を追って跡づけてみることにする。

Mary の具体的な行動が作品中に初めて描かれるのは、第二場面で、衝動的に Jenny を叩いてしまったことを悔やんでいる Bessy を慰めるところである (518-19)。このような優しさを備えた Mary を、作者は “Mary was not a quick child; she was plain and awkward in her ways, and did not seem to have many words in which to tell her feelings, but she was very tender and loving, and submitted meekly and humbly to the little slights and rebuffs she often met with for her stupidity” (519). と紹介している。そのような Mary の価値を Bessy も認めていて、“Mary was a help and a comfort, as she always is” (520). と言う。

翌日の出来事を描いた第三場面で、Mary は、Jem が必要としていたトネリコ材をもらって来、学校の話聞かせると約束して Jenny を早く寝かしつけ、昨晩うまく行かなかった Bessy の計画がつつがなく成就するよう準備する。そういう彼女の態度を、作者は “[T]hus Mary quietly and gently prepared for a happy evening, by attending to the kind of happiness for which every one wished” (520). と総括する。

Bessy の怠慢のせいで “comfortless” になった家に帰って来て、頭痛や Bill の不平の追い打ちで泣きたくなった時、Mary は “Never complain of what you can cure.” とか “Bear and forbear.” という学校の先生の言葉を思い出して自らを抑え、火を起こす準備を始める (523)。薪を持ってくるのを Bill に断られると、自ら黙々と運んでくる (523)。

明日の宿題の準備を犠牲にして Jenny を連れ戻しに行った Mary のことを、作者は “[I]f the teacher could have known how many tasks fell upon the

willing, gentle girl at home, she would not have thought that poor Mary was slow or a dunce” (524)。と書き、彼女の愚鈍さを弁護している。

頭痛のせいで宿題がはかどらず、Jenny との約束を果たせないでいる時、そうなった根本原因は Bessy のわがままであるにもかかわらず、Mary はただ Jenny に済まなく思うばかりである (525)。また、夕食の準備が出来ていないことを Tom と Jem に責められて Bessy が自己弁護している間に、Mary は宿題を中断して兄たちの食事の準備をする (525)。

第四場面に入って、家の掃除を押しつけられたまま Bessy に外出されても、Mary は姉を恨むことなく、むしろ責任の重い仕事を任せてくれたと感謝する (527)。一方で作者は “Mary never did think of any hardships; they seemed the natural events of life, and as if it was fitting and proper that she, who managed things badly, and was such a dunce, should be blamed” (527)。と書いて、Mary の「打たれ強さ」を印象づける。

だだをこねる Jenny を辛抱強く家に連れ帰り (528)、昼食のポテトパイが間に合わなかったことを Tom に責められても、Mary は、黙って耐え自己弁護をすることはしない (528)。また、Jem が自分を慰める言葉をかけてくれた後、「優しい兄を与えてくれた」と神に感謝する謙虚な心の持ち主でもある (529)。

第五場面では、火傷の激痛によるせん妄状態の中でも Bessy に対する思いやりを忘れず、“Please forgive me, Bessy, if I was cross” (531)。と謝る。

以上、Mary を中心に筋をたどってきて明らかなことは、作者は一貫して Mary を「善い人間」として描いている、ということである（「善」という言葉を、筆者は「神の掟やキリスト教倫理に適うこと」という意味で用いている）。

作者はどのような意図で Mary をそのような人間に設定したのだろうか。このことを明らかにするために、Bessy と Mary の行動を次項で比較してみよう。

B. Bessy と Mary の行動比較

「表 3 : Bessy と Mary の場面別行動比較」は、物語から Bessy の罪と考えられる事象を拾い上げ、それに対応する Mary の行動を対比させたものである。

Bessy が罪を犯していると考えられる箇所は全部で11ある。そのうち、八カ所について、Bessy と同じ状況に置かれた際の Mary の行動が描写してある。しかも、Mary の対応はどれも「善いもの」として描いてある。「Bessy の行動の 72.7% について Mary の行動を対比させた上、Mary の対応の方を 100% の確率で善いものにする」という描き方には、作者の作為を感じないではいられ

表 3 : Bessy と Mary の場面別行動比較

場面	Bessy の利己性	対応する Mary の行動
一	①Southport 病院への入院許可証をやっとの思いで手に入れたのに、期待したほどの喜びを母親が示さなかったので、不愉快になる (514-15)	(Mary が Mrs. Lee と直接話をする箇所なし)
二	②自分の計画の邪魔になるからと、Jenny を無理矢理早く寝せようとする (517)	⇒「学校の話聞かせてあげる」と Jenny の興味を引いてから、無理なく寝かしつける (519)
	③Jem のために用意した本に、Jem が関心を示さなかったことから、彼に対して苛立ちを覚える (518)	⇒Jem が必要としているトネリコ材を取って来ることにより、Jem のためになった上、Jem が外出しないで済むようにすることにより、彼のために本を借りてきた Bessy の面目も立つようにする (520)
	④思い通りにならない苛立ちから、ミルクをこぼした Jenny を叩く (518)	⇒Mrs. Jones 宅からの帰り、聞き分けのない Jenny を叱ろうとする衝動を抑え、辛抱強く連れ帰る (528)
	⑤Bessy の反対を押して、夜遅くトネリコ材をもらいに行った Jem が、目的を果たせないまま帰ってきた時、「罰が当たった」と責める (520)	⇒翌朝、Jem のために、登校途中でトネリコ材をもらってくる (520) ⇒Jem のような善い兄が与えられたことを、神に感謝する (529)
三	⑥ウール買ったさの余り、お金を持っている人を妬む (522)	(Mary の金銭に対する考えを描写した箇所なし)
三	⑦Mrs. Foster 宅で編み物を習うのに夢中で、Bill と Mary の夕食の準備を怠る (523)	⇒不平を言いたい気持ちを抑え、火を起こし、夕食を作る準備を始める (523)
	⑧自分の怠慢を棚に上げ、帰宅するやいなや、Mary の都合も聞かず、Jenny を連れてくるよう命じる (524)	⇒「明日の授業の予習ができない」と、一旦は反論するが、結局 Bessy の言うとおり、Jenny を連れに出かける (524)
	⑨編み物に夢中で、勉強中の Bill の質問を蔑ろにする (525)	(Mary が Bill の質問に対処する箇所なし)
	⑩夕食の準備ができていないことを Tom と Jem に責められて、自己弁護する (525)	⇒Bessy が自己弁護している間に、授業の予習を中断して、兄たちのために食事の準備をする (525) ⇒ポテトパイが間に合わずに Tom に責められても、自己弁護しない ⇒Bessy が自分を信頼して家事を任せてくれた、と喜ぶ (527)
	⑪母との約束を破り、家事を Mary に任せて、Mrs. Scott 宅に雑役婦のアルバイトに出かける (526)	
四	該当箇所なし	
五	該当箇所なし	
六	該当箇所なし	

※作成は、Gaskell, Elizabeth. "Bessy's Troubles at Home." *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 3. 1906. New York: AMS Press, 1972. 514-35. による。

ない。即ち、作者は、Mary を Bessy の模範に仕立て上げるつもりなのである (もつとも、Laun は "[T]he moral Bessy is to learn is by no means a simple one. Mary manages to please others, but Bessy with her cleverness and spirit

... can amuse her family as Mary cannot, so Bessy's lesson is not merely to learn to imitate Mary, but to learn tact while retaining spirit" (44). として、筆者とは若干違った見解を示している)。

それは、①自分が自己弁護している間に、Mary が授業の予習を中断して兄たちの食事の準備をしたことを知った Bessy を、作者が "suddenly ashamed of herself, and touched by Mary's quiet helpfulness" (525) と叙述していること、および、②第五場面で Bessy に過ちを論ず Jem が、"[T]hose folks who make home the happiest are people who try and find out how others think they could be happy, and then, if it's not wrong, help them on with their wishes as far as they can" (532). と言って、Mary の行動を模範として引き合いに出すこと、この二つの証拠によって裏付けられる。

これまでの考察で、「Mary の善性を強調し、Mary を Bessy の模範にする」という作者の創作意図が明らかになったところで、本章冒頭に掲げた「準主役級の Mary に火傷を負わせた作者の意図は何か」について考えてみよう。

利己的になって母との約束を反故にした Bessy から見れば、Mary は何の罪も犯していない人間である。その Mary が、自分が家事を任せただけに火傷を負うことは、畢竟、自分の罪の身代わりになったことを意味する。"It was all my own fault" (531). という Bessy の科白は、彼女自身がその事実気づいていることを、如実に語っている。Mary が怪我をすることは、他の誰が怪我するよりも、Bessy の良心を痛ませるのに劇的な効果を生む。作者が、Mary の善性を強調し、彼女を Bessy と対比するように描いた訳は、実はここにある。"They ['God forgive me!'] were the first words she [Bessy] had spoken since she came home" (531). という作者の明らかな誤解 (Bessy は、帰宅早々 "Is it very bad, Mary?" と Mary に尋ねている (531)) は、それだけ「妹を自分の罪の身代わりにした Bessy の良心の痛み」を際立たせんとする創作意図が強いことを、却って証拠立てるものである。

Mary の重要性に着目した批評は少なくないけれども ("It is Mary who set the proper example for her sister Bessy and for the reader" (Bacigalupo 66); "Mary ... is the real heroine" (Easson 205); 多比羅 57)、Mary が愚鈍であることをとらえて、「作者は、家庭的な女性には『知性』は必ずしも必要ではない、と考えている」(Bonaparte 42; Dullemen 161) とするのは、うがち過ぎであろう。Mary が愚鈍なのは、家事の手伝いに時間を取られて勉強する時間が取れないからで (524)、知性がないかどうかについての記述は、厳密には

作中にはないからである。

IV. 結

本稿で述べたことを整理すると、次のようになる。

まず、「I. 序」では、“Bessy’s Troubles at Home”に関する従来の批評には、作品構造への視点が欠落していることを指摘した。それを踏まえて、作品構造を解明することによって、これまでに指摘された作品の主題を再検証することが本稿の目的であると述べた。

次に、「II. 作品構造の解明」では、「A. 六場面の特定」において、粗筋を綿密に分析することによって、①この作品の構成が六場面からなっていること、しかも、②各々の場面は、問題提起（第一場面）⇒「劇中劇」（第二～第五場面）⇒結論（第六場面）、という設定になっていること、更に、③「劇中劇」場面は、「起承転結」構造になっていること、の三点を明らかにした。続いて、「B. 主要人物の登場頻度」では、各場面における主要人物への言及頻度を調べた結果から、MaryとMrs. Leeの存在意義に着目した。最後に、「C. Mrs. Leeの存在意義」で、Mrs. Leeが不在中の場面でも彼女への言及が消えない理由について考え、それには、作者が、①BessyがMrs. Leeと交わした「家庭を“comfortable”にする」という約束を、随時物語の中に提示していること、②子供たちを「母親思い」に設定していること、③家庭内に問題が生じるたびに子供たちに母を行動規範として俥ばせていること、の三つの理由があると指摘した。そして、それはとりもなおさず、Mrs. Leeに「家庭を“comfortable”にする模範的な女性」としての役割が担わされているからである、と結論づけた。

「III. Maryの存在意義」においては、①作品中、Maryの善性が執拗に強調されていることと、②作者は、Bessyの利己的な行動に対比するように、作為的にMaryの利他的な行動を織り込んでいること、の二点を確認した上で、「MaryがBessyの犠牲になって火傷を負うことの意味」について考えた。そして、それは「Bessyを改心に導くのに、それが最も効果的な方法だから」と、結論づけた。

以上の考察から、「IV. 結」の締めくくりとして、作品に込められた作者の創作意図を分析すると、次のようになる。——作者の執筆目的は、「家庭を“comfortable”にするために女性に最も不可欠なことは、利他的“unselfish”

であること」(これが「作品の主題」である)を日曜学校の生徒たちに教えることであった(この作品が、ManchesterのUnitarian派の牧師Travers Madgeが主宰する*The Sunday School Penny Magazine*のために書かれたことについては、《Bonaparte 41; Chadwick 321; Chapple, *Elizabeth Gaskell* 44; Easson 15; Hopkins 96-97, 113; *Letters* 177; Sanders 35; Sharps, J. G. 139; Uglow 299; Wright 59》に詳しい。また、Mrs. Gaskellの彼との交流については、《Chadwick 154, 165-66; Easson 15-16; *Letters* 110, 174, 677, 686, 833, 835; Uglow 156-57, 193, 319, 502》を参照されたし)。その目的を最も効果的に果たすために、まず、生徒たちと同じ年頃の利己的な娘(Bessy)を用意した。それから、その娘に過ちを悟らせる役割を担わせた、利他的な娘(Mary)を創作した。Bessyの後悔を劇的にすればするほど、主題が効果的に読者に伝わるから、Maryの善性を強調し、Bessyの利己性とMaryの利他性を対比するように描いた。その善人を傷つける張本人に仕立て上げることで、Bessyの良心の痛みを最大のものにする意図があったからである。MaryをBessyの「妹」にしたのは、「執筆目的を具現する模範的女性」として二人の母親を指定できる利点があるからである。

このような作品構造を踏まえた上で、本稿冒頭で紹介した先達たちの指摘する作品の主題を見直してみると、didacticな主題の陰に、丹念な構成上の配慮が働いていることが明らかになる(“Mrs. Gaskell invented a plot which did what was required: it illustrated the concluding moral, without appearing too didactically contrived.”というSharpsの指摘(139)は、その配慮の一端を見据えてなされたものとして、興味深い)。

Note

1. Elizabeth Gaskell, "Bessy's Troubles at Home." *The Works of Mrs. Gaskell*, ed. A. W. Ward, vol 3 (1906; New York: AMS Press, 1972) 515. これ以降、作品からの引用は全てこの版により、引証頁数は丸括弧に含め、本文中に挿入する。

Works Cited

- Bacigalupo, Marie D. *The Short Fiction of Elizabeth Gaskell*. Diss. Fordham University, 1984. Ann Arbor: UMI, 1985. 8506315.
- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.

- Chadwick, E. H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories*. London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1913.
- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Chapple, J. A. V. *Elizabeth Gaskell: A Portrait in Letters*. Manchester: Manchester UP, 1980.
- Dullemen, J. J. Van. *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer*. Amsterdam: H. J. Paris, 1924.
- Duthie, Enid L. *The Themes of Elizabeth Gaskell*. London: Macmillan, 1980.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge & Kegan Paul, 1979.
- Gallagher, Catherine. *The Industrial Reformation of English Fiction: 1832-1867*. Chicago: The University of Chicago Press, 1985.
- Gaskell, Elizabeth. "Bessy's Troubles at Home." *The Works of Mrs. Gaskell*. Ed. A. W. Ward. Vol. 3. 1906. New York: AMS Press, 1972. 514-35.
- Green, Robert Charles. *One and Many in the Writings of Elizabeth Gaskell: Increments of a Comprehensive Vision*. Diss. The University of Rochester, 1979. Ann Arbor: UMI, 1980. 8023926.
- Hopkins, A. B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. London: John Lehmann, 1952.
- Laun, Ellen Margot. 'Couchant' *Lion Under Glass: A Study of Elizabeth Gaskell's Shorter Fiction*. Diss. University of Pittsburgh, 1979. Ann Arbor: UMI, 1980. 8015319.
- Reddy, Maureen Teresa. *Elizabeth Gaskell's Short Fiction*. Diss. The University of Minnesota, 1985. Ann Arbor: UMI, 1989. 8519340.
- Rubenius, Aina. *The Woman Question in Mrs. Gaskell's Life and Works*. Uppsala: Almqvist & Wiksells Boktryckeri AB, 1950.
- Sanders, G. D. *Elizabeth Gaskell*. 1929. New York: Russell & Russell, 1971.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. Frontwell, Sussex: Linden Press, 1970.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: The Harvester Press, 1987.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Ward, A. W. Introduction. *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 3. 1906. New York: AMS Press, 1972. ix-xxxii.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. London: Oxford UP, 1965.
- 川口喬一 『小説の解釈戦略：「嵐が丘」を読む』 東京：福武書店、1989。
- 多比羅真理子 「*The Sunday School Penny Magazine* より "Hand and Heart," "Bessy's Troubles at Home" について」 『ギヤスケル論集』創刊号 (1991) : 51-60.
- 山脇百合子編注 「はしがき」 *The Half-Brothers & Bessy's Troubles at Home*. By Elizabeth Gaskell. 東京：北星堂, 1984. iii-v.